

NJ 素流協 News

平成24年1月31日

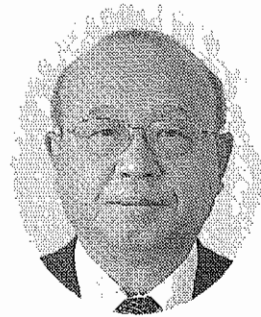
第85号

平成24年1月31日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

年頭所感

ノースジャパン素材流通協同組合

理事長 下山裕司



”新春来福“

平成24年の新春を迎え、組合員及び関係者の皆様におかれましては、今年こそは良い年でありますよう心から御祈念を申し上げます。

昨年3月11日に起きました東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多くの尊い人命を奪うとともに壊滅的な被害をもたらしました。悲憤の思い未だ止み難いものがありますが、多くの亡くなられた方々に對し、心からお悔やみを申し上げます。また、被災された皆様と関係者各位には一日も早く再起の途

が開かれんことを切に願っております。

NJ素流協の組合員や関係者の中にも、東日本大震災によって今もって悲しくそして辛い思いをなさっている方々がおられますが、心からお見舞いを申し上げる次第であります。

このような非常事態ともいう状況下にあつて、多数の組合員がいち早く災害跡の瓦礫処理や仮設住宅建設のための杭丸太、養殖漁業の復興資材としてのいかだ丸太の生産・供給等に尽力されたことは、協力頂いた組合員の方々にしてみれば「自分たちができることをやっただけだよ」と言うかもしれませんが、被災者の皆様に勇気を与える実には尊い行為であり、このことについて私は、深甚なる敬意を表

したいと思えます。

さて、昨年のNJ素流協の事業について若干振り返ってみますと、東日本大震災による種々の影響を受けて素材取扱い流通量の大幅な減少を余儀なくされました。平成22年度の素材流通量の実績は約26万8千³m³でありましたが、平成23年度の素材供給量は残る2月、3月の2カ月の予測量を加えて16万³m³程度になる見込みで、昨年度実績に比べて10万³m³という大幅な落ち込みとなると見込まれます。

今回の大災害は”想定外“の規模で起こりましたから、事業量が大幅に減少したのもやむを得ないことかもしれません。最近になって巷間においては、平成24年は「復興元年」にするのだという、希望を込めた声が聞こえてきます。

NJ素流協といたしましては、依然として厳しい事業環境が続く中にあつても、社会的・経済的動向を見極めるとともに知恵を絞しつつ、先進的な素材流通事業の展開に積極的に取り組んでいくこと

とし、素流協にとっても平成24年が「復興元年」、すなわち新たな旅立ちの年・再出発点と考えたいと思います。

時あたかも国において、『森林・林業の再生に向けた改革の姿』（報告書）を公表し、その中で「10年後に木材自給率50%以上」という具体的な目標数値を示して「真の国産材時代」を招来させるために、この目標の実現のための各施策を展開し始めております。

それでは、真の国産材時代とはどのようなものなのでしょうか。私は、真の国産材時代とは、国産の木材（広義には、木質系原材料Ⅱ森林バイオマス）の需要と供給がバランスする条件が満たされたときに到来したといえるのではないかと思います。ここでいう「需要と供給がバランスする条件」とは、10年後に国産材自給率50%以上になったときの姿が、①国産材を使用した建築資材、家具、紙・パルプ製品、エネルギー原料等が消費者に十分に受け入れられるこ

と、②木材産業界等が国産材を率先かつ十分に利用すること、③素材生産者側が木材加工業界の求める条件に適合した木材を適時適切に供給すること、④伐採跡地が適切に植栽され、健全な森林に再生されること、という4つの条件が十分に満たされていなければならぬと考えております。この4つの条件が整備・定着化してそれが連結環を形作ったものを仮に「日本型森林資源サイクル」と呼ぶならば、真の国産材時代を迎えるためには、このサイクルの形成・定着が不可欠といえましょう。

それではN J素流協の事業は、先に述べた4つの条件の内どのどの分野に位置づけられ、自らの事業の中でどのような貢献ができるのかということですが、直接的には、先の4つの条件のうち③と④が守備範囲と考えておりまして、③については、山元で生産される多様な品質・規格の木材を円滑に流通させることであります。そのためには、多様な品質・規格

の木材をそれぞれ有効に使用する供給先の選定・開拓が不可欠でありますし、多様な木材の物流を含めた効率的な流通システムを構築することでありまして、④については、わが国において唯一ともいえる再生可能な資源でかつ環境資源でもある森林を健全かつ間断なく再生していくことであります。木材を伐採した跡地を新しい森林に更新していくことは「森林資源サイクル」の連結環を定着させるための必要条件かつ絶対条件といえます。そのためには、伐採作業と植栽や保育作業等の森林整備作業を連続させた植伐連続作業システムを導入して伐採と同時に地植え・植栽を実施すること、植え付け苗木本数の削減による苗木代の縮小、コンテナ苗木の使用による植え付け時期の広範（通年）化、保育作業の簡素化等によって省力化や効率化を図りつつ、健全な森林を造成・維持していくことであります。これからはN J素流協の組合員は、自らの事業の中に植伐連続作業シ

ステムの導入を前向きに取り入れていくことが要請されると思います。先に、N J素流協の事業の直接的な守備範囲は、4つの条件のうち③と④だと言いましたが、正確に言うと②の「木材産業界等が国産材を率先かつ十分に利用すること」も含むことになるかもしれません。その理由を言いますと、N J素流協のような素材流通組織は、これまでは森林所有者や素材生産業者が生産した木材を需要者（木材加工業界）に計画的・安定的に流通させることが仕事で、いわゆる木材の供給者と需要者の間に立って木材流通のコーディネーター（仲介役）の機能を果たしてきておりました。すなわち、木材の生産者側と消費者側が主語であり、流通側は述語でありましたが、今後は流通側（流通機能）が独立した立場で、主語としての役割を担っていく必要があります。したがって、木材の流通組織が主語となつて、川上、川下との間において単

なる「つなぎ役」ではなく、「触媒的な役割」を果たすことを追求する必要があると考えております。

ちなみに、「触媒」とは化学用語でありませんが、ある物質とある物質を化学反応させるとき、その中に触媒を入れると、触媒自身は全く変化・変質せずにその化学反応を早めたり遅らせたりする働きをします。私が「触媒的」と言ったのは、自らも変化するという意味合いを込めております。横文字で造語的に表わせば、メタセルフ・カタリスト (Metaseff Catalyst) とでもなりませうか。

メタは「変化」という意味の接頭語であり、セルフ(自身の)、カタリストは「触媒」であります。N J素流協は、将来に向かって「自らも変化する触媒的役割」を果たすべく努力していく考えであります。例えば、N J素流協は、木材供給者側の森林所有者・素材生産業者と需要者側の木材加工業者の意向やその事業活動の動向等を十分に把握しつつ、両者の事業活動

の速度を速めたり遅らせたりするだけではなく、良い意味での変化を促したりすること、またN J素流協自身もそれらの動きに即応して変化していくことであります。すなわち、「川上」―《流通》―「川

作業道散策

22

きつつき(啄木鳥)

きつつきは、からすや雀と並んで一般によく知られている野鳥である。しかし、不思議なことに「キツツキ」という野鳥はいないし、〇キツツキと名が付く種類もない。

「下」の流れの最適化を図ることです。真の国産材時代を迎えるためには、木材流通機能の果たす役割は極めて重要であると考えております。言うは易く、行方は難し。N J

きつつきの仲間の総称は「けら」であり、これに属する野鳥の名前は大部分「ゲラ」で終わる。東北地方では、クマガゲラ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラが知られている。お寺や神社など郊外に建っている木造の建物がきつつ

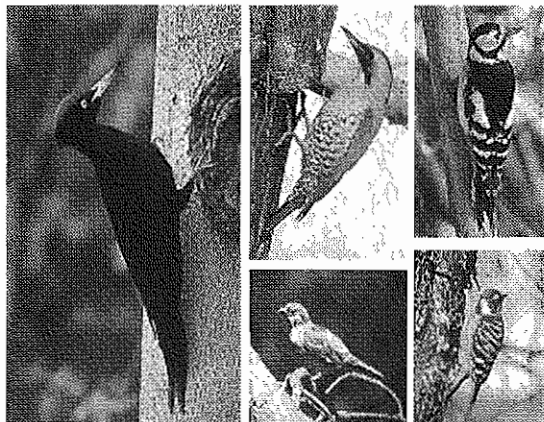


写真1 きつつき類の大きさ(体長)
左:クマガゲラ 45cm(写真:ウイキペディアから)
上中:アオゲラ 29cm、上右:アカゲラ 24cm
下右:コゲラ 15cm、下中:スズメ 4cm(比較対象)

きに穴をあけられることはよく知られており、このため「てらつつき」と称された。これが「けらつつき」に、さらに「きつつき」に転じたという説がある。単純に「木をつつく」から「木つつき」ではないようである。



写真2 きつつき類の尾羽

きつつき類は、共通して木の幹に垂直にとまるが、それには次のような秘密がある。一つは、足の指が前方に2本、後方に2本ある(ほかの鳥は前方に3本、後方に1本)。二つ目は、尾羽2本の軸が太く、先端が鋭くがってっており、これをしっかりと幹に突きたててバランスを保っている(写真2)。一般にきつつき類は、木の中や樹皮の裏側にいる虫を突つきだして食べていると思われているが、意外にも虫、ヒマワリの種やリンゴなどの果物も好んで食べる。

素流協の目標に向かっての道は遠く、それも難路であります。目標に向かって一歩一歩着実に歩を進めていきたいと考えております。組合員の皆様、本年もよろしくお願いいたします。

一葉 樹木の気象害(7)

干害(乾燥害)

樹木は、気象害、根の病害虫、不適切な植栽や移植・管理など様々な原因で乾燥・枯死する。このうち干害とは、健全な状態にある樹木が根からの水分の吸収と枝葉からの蒸散のバランスが崩れて衰弱・枯死する被害を指す。

岩手県ではアカマツの造林地で林の一部分が集団で枯れる被害が発生することがある。被害には次のような特徴がある。

水田や畑地に干割れができて生育に障害が発生するような長期にわたる少雨・高温の夏に発生する。被害は、斜面の肩や小さな隆起など凸出した部分に発生する。

枯れ木は小面積に集中し、周辺部での点状発生は無い。これとよく似た「マツつちくらげ病」(本誌75号参照)があるが、特有のキノコと焚き火跡の有無によって見分けができる。

被害木は、枯れた針葉が付いて

いるもの(写真3)、完全に落葉したものの、幹の樹皮が付いているもの(写真4)、剥がれ落ちているもの(写真5)など、様々な状態のものが混じる。

樹皮下にはマツノムツバキクイムシの寄生が見られる(写真6)。この虫は夏だけに寄生する種類で、寄生された樹木は夏に衰弱状態になったことを意味する。

市街地で見られる乾燥被害としては次のような例がある。

庭園樹や街路樹では、狭い植え枒、あるいは地表面を舗装することによって雨水の地下への浸透が遮断されて、水分が不足する例で、広葉樹の場合は葉の縮れや季節はずれの落葉として現れる。このような被害も、高温・少雨の状態で顕在化するため、気象被害とされることが多い。また、大型土木工事による地下水位の低下や水脈の遮断による枯れで、工事後数年で発生する被害も見られる。

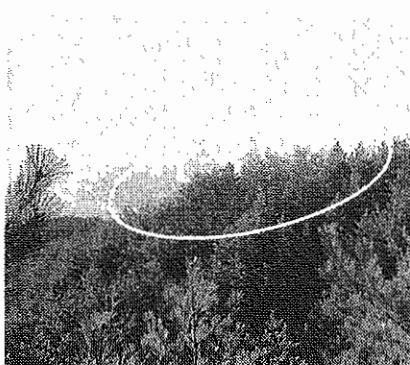


写真1 アカマツ被害林

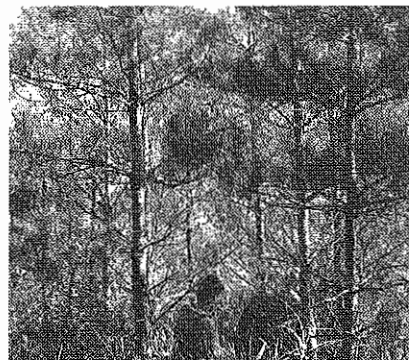


写真2 集中する被害木



写真3 被害木の枝葉



写真4 被害木の幹1



写真5 被害木の幹2



写真6 特有の食跡(マツノムツバキクイムシ)
3, 4本の成虫の食害跡から幼虫の食害跡が拡がる

平成24年1月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約260m³減少、カラマツが約740m³増加、アカマツが約100m³増加し、全体では約570m³増加している。昨年同月と比較すると、スギが約6,480m³減少、カラマツが約2,070m³減少、アカマツは約2,500m³減少し、全体では約11,100m³減少している。なお、今月のシステム販売の取扱量は250m³であった。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は前月より約10m³減少、昨年同月より約4,580m³増加している。
- 3 今年度の年間計画量に対する1か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を83%とすると、今月の全体出荷実績は、計画数量を24ポイント下回る進捗状況となっている。

(m³)

樹種	長級 (m)	販売先				計	今年度累計		
		合板用			その他		合板用	その他	計
		ホクヨー プライウッド(株)	北日本 プライウッド(株)	その他					
スギ	2.0	1,284		1,085	2,370		22,725		
	4.0	583		970	1,553		16,970		
	計	1,867		2,055	3,922	3,316	(766) 39,695	57.0	(471) (1,238) 36,709 76,405
カラマツ	2.0	687		2,486	3,183		23,437		
	4.0	139		316	456		2,596		
	計	837		2,802	3,639	1,622	(250) 26,033	37.4	(246) (1,580) 14,481 40,514
アカマツ	2.0			475	475		1,146		
	4.0			79	79		2,711		
	計			554	554	1,177	(0) 3,857	5.5	(0) (0) 8,359 12,216
その他針					38	38	21	0.0	162 183
広葉樹						110	110	0	0.0 1,142 1,142
合計		2,704		5,412	(250) 8,116	6,262	(250) 69,606	100.0	(717) (3,477) 60,853 130,459
目標達成率 (%)									59.3
計画量									220,000
バイオマス用針葉樹チップ材 (単位:トン)									0トン

長級2.0には2.1を含む、() はシステム販売取扱量(内数)

冗談欄 「目は口ほどにものは言えない」

かつて、さだまさしが歌った「閑白宣言」と言う歌がある。
「俺より先に寝てはいけない。俺より後に起きてはいけない。飯は上手く作れ。いつも綺麗でいる。…」
世の奥さん達に総攻撃を受けた歌詞である。
ひと昔も前だったから許されもしたろうが、今ならどうだろうか。
ところで、平成11年に九州の福岡市で会員11人で設立された「全国亭主関白協議会」なる組織があり、毎年会員が増え続け、今は全国に1万7千人もの会員がいるという。
草食系男子やニューハーフを歯がゆく思う夫どもが、ちゃぶ台をひっくり返す「親父」の復権を目指す会なのかと思うが、違うようだ。
会のパンフには、「会員は、関白とは本来天皇(妻)に次ぐナンバー2の地位であることを自覚し、妻との紛争を平和的に解決するための心構えを日々学習し、実践する。」とあり、段位も授与しているそうだ。
すきま風が吹いている夫婦の燃りを戻す手助けしようというので、夫婦円満の秘訣を標語で表している。
その一つが「非勝三原則:勝たない。勝てない。勝ちたくない。」である。ひよっとしてこの喧嘩勝つかも知

れないと思っても、反論すれば1時間が2時間になるだけである。だから「勝たない」という。また、仮に100%自分が正しいとしても、敵は形勢不利と見れば20年前のことで引き合いに出すに決まっている。
だから「勝てない」のだ。更に、仮に勇気を振り絞って喧嘩に勝ったとしても、敵は反省するどころか、次の機会にそのストレスが5倍10倍になってはね返ってくるのは間違いない。だから「勝ちたくない」という。
この標語のほかに、愛の三原則「有難う。御免なさい。愛してる。」、相づち三原則「そうだね。分るよ。その通り。」などもある。
妻害回避対策の基本原則は決して争うことなどせずに、無条件降伏と絶対服従なのである。
カミサンと仲良く暮らすには、これらの標語を守り、実践せよという訳である。情けない話だが、生活術としては的を得ているようだ。
ちなみに、亭主関白道での十段者は「愛している」と照れずに言える人。九段者は「ごめんなさい」を恐れずに言える人。八段者は「有難う」をためらわずに言える人なそうので、はたして世の亭主の何人がこれらの言葉を出して言えるだろうか。
俺は目でしか言えない。